

五十音のアンソロジー 武富純一

第二十九回歌壇賞受賞作、川野芽生「Liith」を読む。作者は平成三年生まれで本郷短歌会の出身だ。

・なにゆゑに逃げざりしかと問われぬつ共犯を追い詰むる口調に三十首全体から職場でのセクハラにまつわる静かで強い悲しみを思った。ただ、歌意がわかるこうした歌は少なく、どこかに聖書や古典の世界をうかがわせるような抽象的で難解な歌が多い。
・汝が命名^{なづけ}なべて過誤^{あやまち}にてアダム、われらはいまも喩^{たとへ}もて語らふ
・わがウェルギリウスわれなり薔薇^{さうび}とふ九重^{ここのへ}の地獄^{じごく}ひらけば
そして終盤には物語を締めくくるようなこんな歌が置かれる。
・たたかひはうつくしきものの手にわたり地上に生くるほかなきわれは

比較的わかる歌を適所に配置しつつ、謎めいた歌を散りばめてぎりぎりでは想像をつなぎ止めさせる表現力を感じた。三枝昂之は選考で「日常を離れた様式性を感じさせる表現の魅力」と述べる。印象深い歌も多く、一首一首が並々ならぬ力で立ち上がっている。連作におけるストーリー性という要素はその強弱が完成度に常微妙な作用をもたらすものだが、それがあまり強いと詩としての広がりや厚みが犠牲になってしまう。本作品はストーリーに寄りかからず、全歌から思いを分泌させた作り込みが鑑賞の深みに結実したように思う。

書肆侃侃房から「短歌タイムカプセル」というアンソロジーが登場した。編著は東直子、佐藤弓生、千葉聡で百十五人の各二十首選。若手から年輩まで幅広く収録されている。誰が入っていて誰が入っていないとかの些細なことは言うまい。誰がどう作ってもアンソロジーとは常にそういうものだ。

一番の特徴は五十音順という構成だ。だから当たり前なのだけれど岡井隆の前に大森静佳がいたり、寺山修司のあとに堂園昌彦が出てきたりする。従来、アンソロジーの多くは世代別に構成され、私たちはそれに慣れ親しんでいる。雑誌、年鑑や評論でも年代というカテゴリーでの構成や論が基本だ。世代で分ける切り口はわかりやすいし、そのメリットや意義も大きい。世代ごとにその時代を明確に背負った歌も確かに存在する。

しかしながら「一人十色」の進む現代では、もはやこの分類だけでは把握しきれないのも事実だ。若手で文語旧かなを自在に使い、抽象的で難解な歌を紡ぐ若者もいれば、高齢なのによるで青年のような瑞々しい世界を拓く歌人もいる。そもそも年齢で括っただけでこの短詩型を深く語れるはずもない。

そうした側面から本書を読むと、キャリア派も若手も有名も無名も、年齢の壁のないごちゃごちゃの力オス感がとても嬉しい。

また、すでに評価の定まった名歌はしつかり紹介しつつ、従来よく知られていないような歌人や歌をできる限り入れ込んだという強いこだわりもうかがえる。「見落とされてしまった名歌」を编者たちが協力して懸命に発掘し、評価の場に再び置き直す…これは良き姿勢だと思う。私自身、初めて出会った歌にこれまで知らなかったその歌人の側面を見た思いとなった。